

第23回県政知事懇談

湯崎英彦の宝さがし

テーマ【挑戦そして実現！引き出せ広島県の「底力」】

と き 平成23年3月19日（土）

ところ ゆめタウン広島 2F 催事場

広 島 県

目 次 頁

開 会	1
懇 談	3
自由討論	39
閉 会	44

開 会

(知事(湯崎))

それでは、まず開催に先立ちまして、このたびの東北関東大震災におきましてお亡くなりになった方々の御冥福をお祈りしたいと思います。皆様に御協力をお願いしまして黙禱を捧げたいと思いますので、御起立をお願いしてもよろしいでしょうか。

それでは、このたびの震災でお亡くなりになられました方々の御冥福をお祈りしまして、黙禱を捧げたいと思います。黙禱。

【黙 禱】

(知 事)

黙禱、終わります。御協力ありがとうございました。どうぞお掛けください。

今回の震災は本当に激甚でございまして、実はこの「宝さがし」も、もともと先週を予定していたのですけれども、先週はその震災の翌日ということで、県としても支援活動の方針を決める内部の調整をしていたものですから、1週間延期をさせていただきました。

しかしながら、その後、この1週間の間にも次々この震災の被害の状況が明らかになってきているところございまして、それを見ても、今後非常に長い期間にわたって現地への支援が必要になってくると考えております。これは国を挙げて支援していかなければいけない状況だと思いますので、これからも皆様に御協力をお願いしたいと思っておりますので、なにとぞよろしく願いいたします。

そして、きょうのこの懇談会終了後、6時半から7時までの間、1階の食品レジ中央付近におきまして、この会場をお借りしておりますゆめタウンイズミさんと、私も一緒になって義援金の募集をしたいと思っております。お寄せいただきました義援金は、日本赤十字社を通しまして被災地に送金を行いますので、御協力をお願いしたいと思います。また、この会場の入口にも両サイドに募金箱を置かせていただいておりますので、御協力を願いたいと思います。

それでは、県政知事懇談を始めたいと思います。

少し気分が盛り上がれない部分もあるかもしれませんが、被災地があのような状況であるからこそ、日本のほかの地域、震災を受けなかった地域、被害を受けなかった地域は元気に頑張っていないといけないと思うのです。実は、海外では西日本と東日本の違いがよく分からないまま、関空発着の西日本、中国や九州を回るツアーなどが続々とキャンセルされているそうです。そういう意味では、これから日本経済にも非常に大きな影響を与えますので、我々被害を受けなかった者、元気な者、いろいろ活動ができる者は精一杯活動して、この日本を元気にしていけないと思っております。今日は元気に懇談会を進めていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

この懇談会の趣旨を少し私の方から御説明をさせていただきたいと思います。この懇談会は、私が就任した直後から1年と少しの間をかけて続けているものでございます。広島県内に23の市と町があります。よく市町村と言いますが、広島県では村がなくなったものですから、23市町でございます。この各市町で、こうやって10名ぐらいの方々に懇談会のメンバーとして御参加いただきまして、懇談をさせていただいております。県は、直接住民の方といろいろなお話をするという機会が意外と少なく、大体市や町の行政機関とやりとりをさせていただくことが多いのです。県としても、住民の皆様の声を直接やりとりするといった機会を持ちたいと思ひまして、こういうことをやらせていただいている次第です。

この懇談会の目的は、何か特定の課題だとか問題だとか、それを解決していきましようということよりも、普段住民の方々が自分たちの活動の中でお感じになっていることをそのままぶつけていただいて、23市町で10人ぐらいずつ、二百数十人の方々の御意見、いろいろな方の声をいただいております。我々としてはそういった意見をため込んで、私はよく味噌樽というたとえを使っているのですけれども、味噌樽のようにためていって、熟成するといいお味噌ができる。そのお味噌を行政の施策にふりかけて、味の基礎にしていく。つまり、行政の基盤の一つにしていくというのがこの会の目的でございます。そういう意味で、普段お考えのことをそのままおっしゃっていただくのが我々としては大変ありがたいと思ひています。

広島市の場合は非常に大きなまちですので、市役所については、県と同じように、そんなにすぐ身近なものではないと思ひますが、小さな町では普段から非常に身近なので、行政の方には言いにくいと言われることもありますが、遠慮なく、県のことで、市のことで、関係することでも、言っていただいて結構ですので、普段のとおりの御意見をお聞かせいただければと思ひます。

進め方は、最初90分間ほどお一人お一人に御意見をいただいております。大体1人5分ぐらいのめどでお話をいただければ、大体まとまると思ひているところです。その後、30分ほど全員でディスカッションという形をとらせていただきたいと思います。ただ、この時間配分はめどですので、そんなにきっちりしたものではありませんので、適宜進めたいと思ひています。

これから都合2時間かかりますけれども、御参加のメンバーの方々は本当に大変だと思ひますが、御協力をお願いいたします。

また、本日は傍聴にもたくさんの方々に来ていただいております。本当にありがとうございます。土曜日のお忙しいところ、こうやってお時間を割いていただきまして、我々としても大変うれしく思ひます。傍聴の方々はずっと聞いていただく形になって大変恐縮ですけれども、そういう意味では、このメンバーよりも大変な部分もあると思ひますが、是非よろしくお願ひしたいと思ひます。

懇 談

(知 事)

それでは、早速始めさせていただきます。順番にお願いしたいと思いますので、まず、河副さんからお願いできますでしょうか。

(河 副)

こんにちは。よろしくお願いします。「ママの愛デア研究会」の河副と申します。

私たちの今の活動というのは2007年4月よりしておりまして、広島を拠点に食育に取り組む主婦のグループです。

(知 事)

食育ですか。

(河 副)

そうです。食育と申しましても、私たちは、家庭の台所に立つママたちの視点から消費者の意見を発信していきたいと思って活動しています。

主な活動としましては、地域の食品スーパーさんと提携して、地域の公民館などで親子料理教室を開催しております。「ママおいしいね」の子ども笑顔をテーマに、食べることの大切さ、楽しさを伝えています。

また、この料理教室を通して、地域の子育て中のお母様たちに子育てや生活に関する知識なども提供しています。

そして、この活動を通して得られる消費者のニーズがありますよね。若いお母さんからの子育て中のこと、入ってくる意見などを食品のスーパーさんに返してという形で活動をしています。

また、地域のスーパーさんと、消費者視点のレシピ、食育なので食べることが中心になるのですけれども、そのレシピの提案や、食べ方などを地域に発信するようなこともしております。

また、簡単にできることをコンセプトにして開発した、お母さんたちが考えたレシピをホームページなどで発表したりしています。そのような活動をしています。

(知 事)

ありがとうございます。食育というと、特に気になるのが食べ物の安全性だとか、そういう部分もあると思うのですけれども、今、広島県では地産地消といって、広島でできた、またはとれた農水産物を広島で食べましょうといったような運動をやっています。実際に

レシピをつくっていらっしやって、広島はこの地産地消というのはいかがですか。広島の野菜で十分いろいろなおいしいものができますか。

(河 副)

私自身は広島出身ではないのですがけれども、こちらに来て思うことは、産地が近いというのがすごくあります。去年の2月でしたか、廿日市さんと協力して、イチゴを使ったデザートというのを、学校で食育という形でやらせてもらったりして、本当に身近な存在というのにはすごく思います。

(知 事)

広島は、県内でいろいろな気候があるのです。南は暖かく、北に行くと涼しくて、北広島や庄原は温度が低くなって、実は気候的に言うと青森に似ているらしいのです。先週もちょっと寒くて、庄原の高野というところではマイナス10度ぐらいになったらしいのですがけれども、りんごがおいしかったり、いろいろなものが近くで採れるというところもあると思いますね。

(河 副)

それぞれで身近な食材というのがあるので、食育というのも難しいことではなくて、それを使って例えば親子でお料理をしたり、難しく考えずに、取り組めることからと思っています。

(知 事)

なるほど。今、食育について携わっておられて、逆に、一番気になることというのはどんな点でしょうか。

(河 副)

若いお母さんたちの中には、フライパンやまな板を使うのは面倒だという人もおられるみたいなのです。共働きの家庭が増えて、核家族化が進みまして、皆さん、やっぱり忙しいのです。だから、料理ができないママや、時間がかけれないママと一緒に考えるスタンスで、「ママの愛デア研究会」ではレシピを提供しています。電子レンジを効率的に使って、下ごしらえに手間をかけずに、なるべく簡単ということを心がけています。手抜きじゃないのと非難する方もいらっしやるのですがけれども、やっぱり手づくりの初めの一歩というのを体験してもらうのが大事なのではないかと思っています。

(知 事)

無理して手の込んだものをつくろうとして、結果としてあまりやらなくなって、外食をしてしまうよりは、簡単でも家でつくって、手づくりで食べるほうが良いと、そういうことですね。

(河 副)

そうなのです。だから、私たちが考える食育というのは、食育というのは難しい言葉だとは思いますが、台所からの具体的な提案ということに意味があると思っております。こうしたらもうちょっと簡単にできるよ、こうしたら栄養のバランスがよくなるよというのを提案という形で、家庭の台所というのは私たちの出発地点でもあったので、やっぱり最終地点も家庭の台所と考えています。

(知 事)

ありがとうございます。食というものは、僕もいつも感じるのですが、人間は食べた以上のものにはならない。絶対に食べた以上のものにはならないので、ちゃんとしたものを食べていくというのは本当に大事なことですよね。

(河 副)

ちゃんとしたものを食べるのも大事なのですが、その前にちゃんとしたものを選ぶという力が大事になってくると思います。

(知 事)

そうですね。ありがとうございます。

それでは、次に移りたいと思います。北さん、お願いできますでしょうか。

(北)

安佐南区から参りました北といいます。先週は残念なことに延期になったのですが、絵本の読み聞かせをしてくださいまして、ありがとうございました。

(知 事)

ありがとうございました。

(北)

現在、自分には3歳と4歳の息子がいて、僕のほうが育児のほうに携わりたいというのがあるんで、専業主夫をしています。

(知 事)

主夫ですね。

(北)

そうです。これまでの育児で感じたこととして、幼少期、特に2歳ぐらいのお子さんは、すごく成長が早い。大人と違って体重もすごく増えますし、普通、パパだったら土日のみ接していると思うのですけれども、自分は日々の生活に接して、そこで感じるものがいっぱいあるのです。その辺のことをパパに伝えていきたいというので、今年の1月に「ファザリング・ジャパン」に入りまして、この4月に中国支部を立ち上げる形になっています。

私ごとなのですが、長男が去年から幼稚園の年少に入りまして、僕も結構幼稚園の行事にも参加させてもらっています。でも、なかなかパパがいないというのもあって、今、僕の幼稚園にはパパの会やおやじの会がないのです。来年からそれも立ち上げてやっていこうと思っています。パパにも楽しんでもらえたらと。

先ほど意見もあったのですが、食育で結構気になることがあって、去年、食生活アドバイザーと食品品質検定を受けて取得したのですが、幼稚園のほうでちょっと協力してもらって、昨日も子どもと一緒にクッキーをつくって、幼稚園に持って行って、「いつもありがとう」みたいな形で、その辺で食育のほうを考えています。

今回聞きたいのは、僕はパパとして育児をしているのですが、市のプレイルームなどは、ママが中心で、パパがなかなかいないというのがあります。今、県では育児休暇に力を入れていると思うのですが、僕としては育児休暇をとったことがゴールではないと思うのです。そこがスタートだと思います。長年育児をしていますと、社会とのつながりというのが薄れますし、パパもちょっと孤独感というのを感じると思うのです。その辺で、育児休暇をとった後のパパに対して何か県として考えていることがあるのかというのを聞きたいです。

(知 事)

休暇をとった後ですね。今、お答えしてもよろしいですか。

(北)

はい。

(知 事)

そういう意味では、そういう観点は全く抜けていますね。女性の育児、これは必ずしも休暇ではなくて、育児のために職業を離れて、もう一度職業につくというときのサポート

というのは、いろいろな形であるのです。トレーニングをしたり、あるいは、特に資格を持っていらっしゃる方、例えば看護師については、非常に看護師が足りないので、カムバックしてくださいということで、そのための研修を設けているのですけれども、やっぱり主な対象は女性になっています。まだ実際にかなり長期間、職場を離れる男性が少ないということもあって、あまり男性を対象にした施策というのはされていないですね。正直なところね。

(北)

この間、パパの交流の場というのを最近つくりまして、イクメンの座談会を立ち上げさせてもらって、そのチラシを配らせてもらったのですけれども、この1週間で3人入会していただきました。そういうパパの交流の場を求めている人も多いと思うのです。また、そういう場があると、その周りで見ている人も楽しそうだなと入ってきてもらえて、パパのつながりというのが増え、親同士の育児の話をして、育児の一つの楽しさとして、その辺で参画したりするのも一つの手だと思うので、そういう場をつくっていただけたらと思います。

(知 事)

ありがとうございます。本当にある意味でいうと最先端を行っていらっしゃると思うのですけれども、私も育児休暇をとりました。ただ、育児のためにちょっと休みますという制度がないものですから、厳密に言うとは違うのですけれども、とらせていただいて、いろいろな反響を呼びました。

北さんは、実際にそういう立場にあって、広島の中でどういうふうに周りから受けとめられていらっしゃいますか。

(北)

やっぱり主夫というのはなかなか少ない部分もあるので、賛否両論あると思います。僕自身にはいい言葉しか入ってこないのですけれども、ほかではいろいろ言われたことがあると思うのですけれども、結局は自分自身とその家族の間の問題。夫婦で話し合っ、両方の両親とも話し合ったのですが、その辺でいい形ができれば、そのときそのとき、子どもの成長によって変わってくると思うのですけれども、現段階ではこの形でいくのが自分たちでいいと思っているので、この形でいっています。

(知 事)

なるほど。男性が育児をするというか、主夫として働くということを超えて、男性でも女性でも、育児をする立場から見たときに、この広島における育児のしやすさはどうお感

じになりますか。北さんは、ちなみにずっと広島にいらっしゃるのですか。

(北)

ずっと広島です。

(知 事)

広島生まれ。

(北)

廿日市のほうにいて、下の子が1歳になったときに広島市に来ました。

(知 事)

そうですね。どうですか、実際に子育てをされていて。

(北)

そうですね。やっぱりママが中心というのが僕の周りではまだありますけれども、その辺も根本から変えていきたいというのがあって、「ファザーリング・ジャパン」で活動しています。これからやっていきたいと思っています。

(知 事)

環境的にはどうですか。

(北)

男性、女性に関係なく、広島市のほうでも、常設の、毎日開いているプレイルームというのが増えてきています。そういう面では、育児はしやすくなっていると思います。

あとは、広島県のほうでも「あいあいキッズ」、宇品のほうにできていて、あそこは休日もあいているので、ショッピングのとき、ママが買い物している間にパパが入っているということもあって、パパも入りやすいというところはあると思います。

(知 事)

そうですね。ありがとうございます。今、広島市も県も力を入れてやっているところですので、そうやって感じていただけると、我々としても大変うれしいと思います。

これは、私とその休暇をとったときに感じたのですけれども、まだまだ価値観として、男性が育児をやるというのは、けしからんとまでは言いませんけれども、ちょっと違うのではないかという感覚がまだ強いと思うのです。特に、知事という立場で休みをとるかど

うかという、これはまた別の問題もあるのですけれども、一般的にも男性が育児休暇をとります、というときには、とりにくいという話があります。例えば1週間、男性が育児休暇をとると、非難あるいは無言のプレッシャーが来るわけです。何であいつは子育てで休暇をとりにやがってと。ここにプレッシャーを受けるわけです。ところが、結婚して新婚旅行で1週間から10日休むということについては、みんな「おめでとう」と言って祝福するのです。結果として1週間なり10日なりいないというのは同じじゃないですか。同じように職場の周りの人に負担がかかって、同じことをやっているのだけれども、その理由で区別される。育児の場合にはけしからんと言われて、新婚旅行の場合はおめでとうと言われる。ということは、これは全く価値観の問題だというふうに私は思うのです。その価値観を変えていかないと、本当の意味での男性の育児参加というのは難しいと思っています。北さんは、ある意味でいうと、本当にパイオニアで、身をもって例としてやっていただいているので、これからも引き続き頑張っていただければと思います。

(北)

そうですね。楽しみながら頑張りたいと思います。

(知 事)

よろしくお願いします。ありがとうございます。

それでは、齋藤さん、お願いいたします。

(齋 藤)

今日は懇談会に呼んでいただいて、とてもうれしく思っております。私はNPO法人青少年交流・自立・支援センターCROSSの代表をしております齋藤と申します。CROSSは、もともと平成16年にフリースペースを中区吉島で、一戸建てで始めました。

(知 事)

フリースペースですか。

(齋 藤)

はい。そこは、引きこもりがちな青少年が家からまず一歩、安心して出る場所をつくるために始めました。初めのころは3名ぐらいしか通っておりませんでした。だんだん増えてまいりまして、フリースペースを経由して社会に出て行く若者が大勢出てまいりました。ただいまの場所は横川駅から歩いて5分ぐらいのところの楠木町の一戸建てを使って、やはりフリースペースを続けております。

現在は、フリースペースのスタッフは、臨床心理士3名を含む有償スタッフと無償ボラ

ンティアを含め6名で運営をしております。それ以外に、広島市のほうからひきこもり相談支援センターの事業を受託いたしまして、週に5日ほど、やはり同じ建物内で相談所を開いております。

相談業務だけではなくて、やはり青少年の自立支援をしておりますと、そこからいろいろ必要なものが出てまいります。社会体験事業といって、これはもともと文科省の事業だったのですが、それを3年、ひきこもりがちな青少年の長期社会体験事業を3年やりまして、その後、同じ事業を広島市で今続けて3年やっております。

そういう事業であるとか、あとは就労支援であるとか、ここ最近では、相談者の方の中に発達障害など、病気がある方が増えてきたので、去年の秋から地域活動支援センターⅢ型、いわゆる作業所、クロスロードというのを横川駅から歩いて2分ぐらいのところにつくりました。

そうやって今、活動の種類をいろいろ増やして行って、何とか社会に出たいけれども、出ることができない青少年を1人でも多く自立させていきたいと考えています。

(知 事)

ありがとうございます。ひきこもりというのは、発達障害とか、そういう障害を原因として始まる方もいらっしゃいますけれども、そうではない人たちもたくさんいらっしゃいますね。

(齋 藤)

そうですね。一つ一つのケースは全く違いますので、全く病的なものもなく、発達障害もなく、長年引きこもる方もあります。

(知 事)

そういう子どもたちが増えてきたというのが実態だと思うのですが、これはやっぱり都会で顕著なものなのですか。それとも、ほかの地域でもかなりあるものなのですか。

(齋 藤)

そうですね。都会、田舎は関係なく、あります。むしろ田舎のほうが地域でのつながりが強いために、いったん社会に出られなくなると、近所の目が気になって出られないという重いケースが田舎のほうは多いです。むしろ都会の場合は、コンビニだったり、本を買いには出られるけれど、というぐらいの比較的軽度のひきこもりの方が多いです。

(知 事)

実際に活動されていて、そういう青年たち、あるいは少年たちが社会に出てくる一番大

きなきっかけになるものには、どんなことが多いでしょうか。

(齋 藤)

そうですね。人とのつながりですね。例えば保健師であるとか、あるいは相談に来る相談員ですね。誰か特定の人を信用できるようになった方は、やはりそこをきっかけにして社会とつながっていくことができます。引きこもっている方は、家庭の中で家族ともなかなかつながりを持ってない方もおられます。そういう意味では、両親や親戚の方を信頼することができる状態の方は、比較的いい状態で引きこもっているのです。そういう方の場合は、サポートをすると、本当に優秀な方も多いので、とても大きな力を持っておられて、社会に出てから活躍をしておられる方があります。

(知 事)

なるほど。逆に、地域とか田舎だと人間関係が濃いので余計に難しくなるというのがあるとおっしゃいましたが、必ずしも、これは地域で見守るというよりは、誰か信頼できる人がとにかくどこかにできていくということが大事だと、そんな理解でよろしいでしょうか。

(齋 藤)

そうですね。やっぱり自分が家にいると、次第にひがみ妄想が出てまいりまして、周りの方が自分を悪く言っているのではないかというようなことをどうしても考えてしまうので、やはりそうではないというところを、引きこもっている方が思うことができれば、社会に出てみようかな、いいことがあるかもしれないと。今の若者たちは、社会に出てもいいことがないに違いないと、自分はこのままずっと家にいたほうがいいに違いない、そういうふうに思い込んでいる方も多いです。これはやはり社会の問題もあると思ひまして、やはり社会の歪みというのが青少年に大きくのしかかっているのかなというふうには感じます。特に働く場所ですね。ブランクのある方はなかなか採用してもらえず、力を認めてもらえる場所があまりないものですから、ワークシェアをしていただける会社で、ブランクがあっても受け入れていただけるところが増えるように是非お願いしたいと思ひます。

(知 事)

ありがとうございます。ひきこもりの状態にある子どもたちというのが、全国でいうと0.56%あるということなのですけれども、広島県で換算すると約七千世帯弱というところらしいのです。その子どもたちもどこかから大人になるわけで、その方があまり生産的な活動に携われないということは、社会にとって非常に大きな損失だと思うのです。どういう形でも生産的な活動ができれば、非常に大きく貢献できるが、それができない。これか

ら少子化や、高齢化などで、生産年齢人口が減っていくという中では、非常にもったいない話ですので、少しでも社会と向き合っ、つながりが持てるようになると思います。

(齋 藤)

そうですね。確かにひきこもりの定義をどうもっていくかで、人数は大きく変わってきます。ただ、ひきこもりかどうか分からないですが、社会に出て行くのに、自尊感情を持たずにいる若者というのは非常に多いので、何かきっかけがあれば、家から出にくくなるという方はかなり多いのではないかと思います。

(知 事)

ありがとうございます。本当に、地道な活動をされていると思いますけれども、これからも是非頑張ってくださいと思います。ありがとうございます。

(齋 藤)

ありがとうございます。

(知 事)

それでは、定行くん、お願いいたします。

(定 行)

私は広島市立広島工業高等学校情報電子科2年の定行と申します。よろしくお願ひします。

私たちは、昨年度、先輩方が行った二酸化炭素のセンサーユニットの自主開発と、温暖化対策技術の基礎研究の2点をもとに、環境の監視に活用できる電子百葉箱の開発を行いました。既存の計測システムより安価で簡単に設置ができるということを目指し、気温、湿度、気圧、雨量、風向、風速、照度、二酸化炭素濃度、また、GPSなどを研究目的として計測できます。

その計測したデータをネットワーク経由でサーバーに自動取得させ、蓄積したデータを分析することができます。

開発した電子百葉箱を各地域のある小中学校に設置できると、広島県の環境の変化など、環境の「見える化」が図られ、環境教育にも展開できると思います。

また、昨年、12回、APNGキャンプに参加させていただきました。こちらは広島で開催されたのですが、アジアのネットワーク技術者が集まる研究発表に参加させていただきました。

(知 事)

僕も、懇親会に行きました。

(定 行)

はい。最初の挨拶のときに参加されていまして。そこで、日本の高校生を代表しまして、発表させていただきました。

(知 事)

そうですか。

(定 行)

はい。そこで英語で発表させていただいたのですけれども、環境問題を語る上では、国際交流が大事だなと思いました。

また、現在、学校内で携帯電話の持ち込みが禁止になっておりますが、スマートフォンなどのAR技術、拡張現実技術を利用した学習やコンテンツ開発など、教育現場で効率的な活用ができればと思います。

それらのことから、現在携帯電話は規制されていますが、教育への利活用が充実していくことが重要だと思っております。

また、私は学校で学習したセンサーネットワーク技術、この活用にも携帯電話が必要不可欠だと思っております。

また、APNGキャンプの13回が2月にあったのですけれども、そちらは資金不足ということで行けなくなりました。先ほど言いましたけれども、国際環境問題を語る上では国際交流が大事だなと思っております、できればそういう高校生のチャレンジに対して、県のほうから支援が出ればと思っております。

(知 事)

ありがとうございます。幾つかお聞きしたいことがあるのですけれども、まず最初に、必ず高校生の人が出てきたら聞いているのですけれども、定行くんは今2年だから、今年3年ですね。卒業後の進路はどういうふうに考えていますか。

(定 行)

卒業後は県内の大学に進学しようと。

(知 事)

県内でね。そこがまず第一の質問だったのですけれども、高校を卒業したら広島県に残りたいですかという質問で言うと。

(定 行)

大学を卒業したら、いったん県外に出ようかと思えます。

(知 事)

なるほど。それは。

(定 行)

コンピューター関係の仕事につこうと思っていますので、そういった技術を学ぶ上では世界を見て回りたいと思っています。その得た知識を広島にフィードバックできたらと思っています。

(知 事)

ありがとうございます。すごく優等生的な回答で。

(定 行)

ありがとうございます。

(知 事)

これで、統計は何ですか。

(事務局)

今の定行くんを入れて11対7です。

(知 事)

定行くんを入れて、11対7で広島に残りたいという答えでございました。これまで、ですから、18人、高校生に出てもらっているのですけれども、ちょっとうれしいです。ちょっと勝っていますからね。

でも、いや、私は出たいという人たちもいて、そういう子たちの声こそが私は重要だとも思っています。何でそうなのかということですよ。定行くんが言ってくれたように、外の世界を知るということは、自分を知る上でもすごく大事なことだと思うのですよ。世界を知るためには自分を知らなければいけないでしょう。自分を知るためには、やっぱり世界を知らないとは分からないですよ。どういうところに自分が位置付けとしてあるのか。

それを知ると、ふるさとがどんなにいいところかということも分かるし、逆に、どんなところが足りないのか。あるいは、いいところを伸ばして、もっとこんなことができるのではないかということが分かると思うのです。ですから、そういう意味では、大学まで広島にいて、いったん出て、世界の技を身に付けて広島に帰ってくるというのは、本当に優等生で、ありがとうございます。

今、技術的な勉強をされているのですけれども、私も実はIT業界にいまして、いろいろITについては感じるところもあるのですけれども、広島のIT環境とか、ITの技術は、どう見えていますか。

(定 行)

ITの技術と言いますと、現在、広島市のほうで環境の見える化というので、デジタルサイネージを使ったコンテンツ開発を行っています。

(知 事)

ちなみに、デジタルサイネージというのは電子看板ですね。最近ときどきありますけれども、ホテルや駅に行くと、テレビの端末みたいなのがあって、そこにいろいろな情報、例えばバスの運行状況や、あるいは広告が流れる、そういうのがあると思いますけれども、そういうのをデジタルサイネージと言います。

(定 行)

それで、私たちがつくった電子百葉箱を各地に配置して、そのデータをデジタルサイネージに表示させるということで、それに参加させてもらいまして、私たち高校生にそういう機会を与えていただきまして、非常にありがたいと思っています。

(知 事)

それはいいですね。

(定 行)

広島県はIT環境としてはまだまだ見直さないといけないところもあるかもしれませんが、私たちが世界を見て、それを広島県のほうにフィードバックといいますか、そういうものができたらと。得た知識を広島県で使えたらと思います。

(知 事)

そうですね。私は正直言うと、広島県のIT環境、レベルというのはまだまだ不十分だと思っています。実はブロードバンドの普及率も、ほかの大都市と比べると低いのです。

利用という観点からも、まだ課題があると思っておりますけれども、ただ、一つチャンスなのは、今、デジタルサイネージとかをやってもらっていますけれども、特に広島市の場合には、土地柄、海外、特に欧米から来るお客様も結構多くて、そういった方々に対して、例えば広島の情報を提供していくというのは、とてもITになじみやすいことでもあります。実は県でも今ちょうどやっているのです。スマートフォンを使って多言語でいろいろな情報を提供して、また、提供するだけではなくて、外国の人たちが実際にどんな行動をしているのかの調査をしています。要するに、どんなところに関心を持って、どういう動線で動いているのかというのを分析して、もっと気持ちよく広島を観光してもらえるようにはどう改善したらいいか考えるためにやっているのです。そういうのはまさにITの情報収集として、また、スマートフォンですから、百葉箱のような、これはM to M, machine to machine と言うのですけれども、世界でもあるわけです。そういう機会もありますので、これからいろいろな形でITを役立てていきたいと思っています。ありがとうございました。

それでは、藤本さん、お願いできますでしょうか。

(藤 本)

よろしく申し上げます。広島蝶鮫の藤本と申します。佐伯区湯来町、湯来温泉のずっと山の奥のほうなのですけれども、そこでチョウザメの養殖をしています。

以前、知事とは名刺交換させていただいて、いろいろ、うちの営業内容などを一度郵送して、また返事をすぐいただきまして、非常に励まされました。ありがとうございました。

また、今回、今まで話を聞いていますと、すごく立派なことをされている方ばかりで、こんな真ん中に座っていていいのかと思いつながら、非常に申し訳ないですが、県内では唯一、チョウザメの養殖をしています。

(知 事)

そうですね。チョウザメは、傍聴の方もお分かりだと思いますが、キャビアですね。チョウザメの卵がキャビアです。

(藤 本)

そうです。キャビアと言うと皆さん御存じなのですけれども、チョウザメと言うとなかなか知らない方が多くて、チョウザメというのは海にいるのに、何で湯来町のほうで飼えるんという質問がかなりあるのですけれども、チョウザメというのは、サメ科ではない。チョウザメ科という独立した種類なのです。サメと親戚でもないのです。全然違う種類です。

(知 事)

そうなのですか。それは私も知りませんでした。

(藤 本)

これはプロの料理人さんでもまだ知らない方が多いのです。うちはもともとがヤマメやニジマスの養殖をしていました。そこから趣味でチョウザメを飼い始めて、ある日、大きくなったので、うちは子どものころからヤマメの養殖をしていましたので、魚を飼って、大きくなったら食べるというのが常識だったので、食べてみたのです。そうしたら、意外にも、本当においしい魚だったので、うちはキャビアがどうこうというより、チョウザメの肉をどんどん食べていただきたいというのが一番で、3年前ぐらいからチョウザメの養殖を本格的に始めました。

(知 事)

ちなみに、どんな味がするのですか。どんな肉なのですか。

(藤 本)

白身で、淡水魚なのですがけれども淡水魚らしくない。今、うちがキャッチフレーズにしているのが、フグのような食感、タイのような甘みということでやっています。実際に食べられたお客さんも、あ、本当にそうじゃねということをお願いしていますので、非常に食べやすい、おいしい魚です。

(知 事)

歯ごたえが割とあって、味が濃いのですか。

(藤 本)

そうですね。濃いです。おいしいです。

(知 事)

淡水魚というと、臭みがあるようなイメージがありますけれども、そういう感じではないのですか。

(藤 本)

そういう感じではないです。誤解されている方が多いと思いますが、うちももともとヤマメやニジマスをやっていたし、引き続き同業者でヤマメ、ニジマスを一生懸命飼って出荷されている方もいます。海の魚でも一緒だと思いますけれども、川魚というのは、

水がきれいだとおいしいのです。もう一つが鮮度です。この二つを大事にして、あとはえさとか、その辺もしっかりしたものを食べさせるというところでもかなり味が変わってきます。なので、その辺をしっかりアピールして、広島というのは本当に川のまちで、川がしっかりいっぱいありまして、上流のほうに行くと、すごくきれいな水が流れていますので、その水を利用して、どんどんそういうヤマメ、ニジマスも含めて川魚をどんどん広げていければと思っています。

(知 事)

ありがとうございます。水がきれいだとおいしいということなのですからけれども、広島も、非常に川がきれいですよね。

(藤 本)

そうですね。

(知 事)

よく川がきれいな代表に上高地の梓川とかがありますね。私は修学旅行で行って、きれいな川だと思ったのですが、なんとなく「きれいな川」と言うと、長野とか、北海道というイメージがあるのですけれども、特に広島の北西部の川というのはものすごくきれいですよね。

(藤 本)

そうですね。

(知 事)

だから、そういう意味では、おいしい川魚が捕れる、あるいは育てるには非常に適したところだということですね。

(藤 本)

そうですね。

(知 事)

でも、正直に言って、チョウザメを扱っている人は周りにあまりいないですよね。

(藤 本)

そうですね。

(知 事)

ノウハウは、試行錯誤で得られたのですか。

(藤 本)

全国に 30 軒ぐらい養殖業者さんがいると思うのですけれども、ただ、県内では、うちが今のところは唯一です。

(知 事)

オンリーワンですね。

(藤 本)

そうです。いろいろなノウハウは、うちが 10 年ぐらいになるのですけれども、20 年ぐらい前から始められたところがありますので、岩手県とか、茨城県とか、北は今、大変なのですけれども、また南のほうでは宮崎県などがかなり先進地なので、そういうところへ行って、いろいろと教えてもらいました。

あとは、広島湯来町に合うような飼育方法ということで、まだまだ始めたばかりなので、さっき言われたように試行錯誤している最中ですが、どんどん広がっていけばと思っています。

(知 事)

ちなみに、実際にその出荷もされているのですか。

(藤 本)

そうですね。一番今メインにしているところが、地元です。湯来町で、やっぱり地元を飛び越えてほかのところへということは、まだ今のところは考えていないので、とにかく地元湯来町でしっかり、湯来といえばチョウザメというイメージがついたところで、また広島市内や県内へという順番で広げていきたいと思っています。

(知 事)

湯来の名物にしたいということですね。

(藤 本)

そうですね。

(知 事)

分かりました。ありがとうございます。本当にパイオニアというのは大変だと私は思うのですけれども、是非頑張ってください。ちなみに、私は、藤本さんがつくられたキャビアをいただいたことがあります。

(藤 本)

そうですね。是非肉のほうも、おいしいですから。

(知 事)

はい。今のお話をお伺いするまで知らなかったのです。

(藤 本)

そうですね。湯来町が何年か前に広島市に合併して、僕の不得意なところを補うように、いろいろな人が集まってきてくれました。それで今、支えてくれているところで、本当に広島市に合併して、うちとしてはプラスになることばかりで、これからもどんどん助けていただこうと思っていますので、是非よろしくお願いします。ありがとうございました。

(知 事)

ありがとうございました。

それでは、山本さん、お願いいたします。

(山 本)

よろしくお願いします。「アーキウォーク広島」という団体に所属しています山本といいます。西区のほうに住んでおります。湯崎知事に資料をお渡ししたいと思います。

今日は紙芝居をつくらせていただきましたので、これを見ていただきながら、私たちの、アーキウォーク広島の団体の紹介をしていこうかと思っております。

(知 事)

せっかくですので、見えるように、私がこっちに行きますので、皆さんに見えるようにお願いしていいですか。

(山 本)

はい。私たちアーキウォーク広島という名前の由来なのですが、まずアーキというのは architecture, 建築, ウォークというのは歩く, 要するに、アーキウォーク, 「建築」と「歩く」を足してアーキウォークとなっております。広島のスてきな建築を見て歩いて、広島

の建築を外に、中でもいいのですけれども、アピールして、広島を盛り上げていこうという団体になっております。

活動紹介として、今、湯崎知事さんにお配りしたのですけれども、建築ガイドブックを作成しまして、市内各所で配布しております。こちらは日本語だけではなく、広島は外国人の観光客も多いということがありまして、日本語バージョンと英語バージョンを併用してつくっております。こちらは7,000部刷っております、もう残りがほとんどないのですが、市内各地で配布しておりますので、是非手にとって見てみてください。

続きまして、昨年10月に建築の公開イベントを行いました。普段非公開の建物を特別に公開していただきまして、参加者を募って、皆さんで回っていこうということをやりました。昨年のイベントで、定員40名のところ、応募者が100名超えになりまして、抽選になりました。その応募者の方が、広島市内だけかと思いましたが、東京とか大阪とか、外から来られる方もたくさんおられました。

こちらが建築公開イベントの様子になっております。今回10月に行ったのは、市営基町アパートの屋上、普段は鍵がかかっていまして入れないのですけれども、この日は特別に屋上に上がらせていただきました。商工会議所から平和公園を眺めながら、いろいろと建築の説明をさせていただきました。

建築公開のイベントその2として、広島アンデルセンに行きまして、昼食を食べながら、当事者の店長さんのお話を聞きながら、被爆の建築の活動についてお話を聞いております。世界平和記念聖堂、こちらは市内の中心部にありまして、こちらのボランティアガイドさんと提携しまして、建築の案内をしていただきました。

先ほど課題と言いましたが、支援していただきたいことが一つありまして、イベント保険の仕組みなどがあります。

もう一つ、これが来年度、実は先ほど言いました建築見学コースを考えていまして、是非、できたらですが、県庁などの建物を一般公開させていただけないかという思いがありまして、これもお願いの一つになっております。よろしく申し上げます。

一応、紹介はこちらです。

(知 事)

どうもありがとうございました。建築物は本当におもしろいというか、私も建築家の友人が何人かいて、おもしろいと思うのですけれども、広島市の場合には原爆の被害というものもあって、被爆建物という、ある面でいうと非常に歴史的価値の高い建物がある一方で、古い建物がかなり失われていますよね。広島における建築の魅力というのは、どういう特徴があるのでしょうか。

(山 本)

いろいろな有名な建築家の方が建てられた建物も多いと思います。広島平和記念聖堂の丹下健三さんとか、県内でいいますと尾道のほうで安藤忠雄さん。

(知 事)

尾道市立美術館の。

(山 本)

はい。実はそういった有名建築も瀬戸内海にはいっぱいありますし、先ほど言われた古い町並みや集落、名もなき建築家と私のほうで言わせてもらっているのですけれども、そういった古い集落が広島にはいっぱい残っています。そういったものを掘り起こして、皆さんに、観光資源として、アピールして行って、広島と言えば宮島と原爆ドームというふうに思われがちなのですけれども、それだけではなくて、尾道に行ったら安藤忠雄さんの建築もありますし、そういった集落、古い町並みも残っているよというのをPRしていくのが私たちの役目かと思っています。

(知 事)

なるほど。ありがとうございます。建築や街並みというのは、いわゆるソーシャルキャピタルと言われるものだと思うのです。つまり、一つ一つの価値はもちろんあるのですけれども、例えばそれが集まってくると、また別の価値を生んでくるというのがあります。いわゆる重建地区とかに指定されるのはその典型だと思うのですけれども、必ずしもそんなものだけでもなくて、かえってばらばらだったら、ばらばらのよさがありますよね。東京の、例えば歌舞伎町というのはある意味では特殊な世界をつくっていて、あれはあれで特徴があっておもしろいのではないかと。秋葉原とかそうですねけれども、やっぱりみんなが意識をしてストックとしてためていかないといけないので、なかなか大変なものでもありますよね。

アーキウォークは、大体見るということに主観を置かれているわけですか。

(山 本)

そうです。見て回るだけではなくて、見て歩いて、写真を撮りながら、この建物の設計者はどういう意図を持って建てたのかということを考えながら、先ほどの平和記念聖堂であればボランティアガイドさんの案内を入れながら、自分の思いを試行錯誤しながら見て回るというのがアーキウォークの見て回るということかと思っています。

(知 事)

なるほど。その建築の後ろにあるもの考えるということですね。

(山 本)

そうですね。建築、建物、外壁だけではなくて、中身の設計者の意図を汲み取りながら、ということですね。

(知 事)

なるほど。そういういいものがまとまってくると、さっきおっしゃったように、いろいろな人にその情報を提供したら、新しい観光名所になるということですよ。

(山 本)

そうですね。広島にはまだまだ本当にたくさんのいろいろな建築物や町並みというのが眠っていると思いますので、是非そういうのも掘り起こしながら見ていったらおもしろいかなと思っております。

(知 事)

ありがとうございます。広島市だけではなくて、いろいろな特徴あるまちもたくさんありますので、是非そうやって発掘して、情報発信していただけるとありがたいと思います。新たな魅力づくりですね。

(山 本)

そうです。

(知 事)

ありがとうございます。よろしく申し上げます。

(山 本)

ありがとうございました。こちらこそよろしく申し上げます。

(知 事)

それでは、伊折さん、お願いします。

(伊 折)

こんにちは。はじめまして。私は、安田女子大学3年の伊折と申します。よろしく申し上げます。

大学内のサークルであるボランティア部に所属しておりまして、部長を務めさせていた

だいていました。ボランティア部の活動としまして、広島市や安佐南区の社会福祉協議会から要請のあるボランティア活動や、各地域で定期的に活動が行われているボランティアサークルさん、本学内で行われている活動の大きく分けて三つの活動をさせていただいています。

また、学外の活動としまして、安佐南区社会福祉協議会さんからの紹介をきっかけに、入門講座を経て、手話サークルにも所属しております。

社会福祉協議会からの要請ボランティアと、各地域で定期的に行われているボランティア活動では、主に障害を含む子どもの保育や、障害のある方との交流や活動支援をしています。

学内で行う活動としましては、学園祭などで私たちの活動を、地域の方や学生に向けて発信していく活動と、合宿などのように部内の親交を深めてボランティアとは何かということについて考えたり、知識を得るための研修発表など、活動をよりよいものにしていくための内部への活動を行っております。

活動を全体的に見ますと、自分たちから何かを提供するというよりは、そのときに困っていることや、困っている人の手助けをするという活動を行っています。

その中で私が感じることは、つながりの大切さです。人と人とのつながりや、学問と活動のつながり、そして、これから未来まで継続して続けていくということが大切であると感じております。

現在では、隣近所や、それだけではなく、人自体とのかかわりや人づき合いが希薄になっている現状があると思います。その中でボランティア活動では様々な活動に参加することで、子どもからお年寄りの方まで、普段話したことのない方と交流することや、活動を体験することができます。そのことが非常に重要になると感じております。

ボランティア部の新しい取組みとしましては、昨年行われた広島市の地域推進活動の一環として、タウンミーティングというものに参加させていただいたのですが、それをきっかけに、同じ地域なのに交流したことのなかった毘沙門台の高齢者向けのサークルさんとともに、これからはお互いの強みを生かし合いながら活動をしていきたいと始めております。高齢の方からは着物や浴衣などの着方を学び、学生からはレクリエーションや防犯などについての知識を提供していけたらいいのではないかと考えております。

最近では2月2日にもとも節分の行事としまして手巻き寿司をつくって食べたり、お話をしたり、歌を披露したり、手をつないで輪になり踊るなどして楽しく活動しました。

また学外の手話サークルでは、まだまだ初心者ではありますが、勉強しながらより多くの耳の聞こえない方とも交流を広げられるように頑張っていきたいと思っております。一つ一つの出会いや機会を大切に、これからも人とつながっていける活動をしていきたいと思っております。

(知 事)

ありがとうございます。伊折さんはボランティア部なのですが、勉強の専門は何をされているのですか。

(伊 折)

日本文学を学んでいます。

(知 事)

ボランティア部に入ろうと思われたきっかけは何だったのでしょうか。

(伊 折)

ボランティア部に入ろうと思ったきっかけは、高校のころからボランティア部に所属しており、また大学でも続けたいと。

(知 事)

高校のときにボランティア部に入ったのは、どういうきっかけだったのですか。

(伊 折)

それは、中学校のときに福祉といいますか、その関係でもっと手助けが必要な方がたくさんいるという話を聞いて、何か自分にもできることはないのかと思ったところに、高校にボランティア部という部活があったので入ってみようと。

(知 事)

なるほど。小さいころからそういうのを考える機会があったのですね。

(伊 折)

はい。そうですね。

(知 事)

福祉というか、特に障害者、これからは高齢者の福祉も非常に重要になってきます。多分一般の人は、普通の学校に行って、普通の仕事をしていると、障害者の方々とつながりを持つ機会がすごく少ないと思うのです。実際には、社会の中には大体 5%から 6%ぐらいの障害者の方がいらっやって、5%から 6%というと、クラスに例えば 40 人学級があったら、何人かは必ずいるはずなのです。既に本当に障害のある方は、そこから別に特別支援学級に行ったりされていて、そこにいない状態なのですが、本当は日常の中にと

くさんいらっしゃる。そういうことに気がついていないことが多いのかなと思いますし、そうやってボランティアを通じて障害者の方々が社会とのつながりをもっともっと増やしていくことができれば、本当にすばらしいと思います。若い人が、もっとたくさんそこにかかわっていかねばいけないと僕は思うのですけれども、すみません。一方的にしゃべって申し訳ないです。

先般、滋賀県で障害者の関連の大きなフォーラムがあって、私もそこに行ってきたのですけれども、5県ぐらいの知事が来ておられました。その中で、さっきひきこもりの話で、ひきこもりの人たちが非常に大きな能力を持っていたりするというお話がありました。ある意味で言うと非常にセンシビリティが高いのでひきこもりになってしまうのだけでも、その分、逆に言うと別の能力が発揮できる場面がある。障害者の方もそういうケースがとてたくさんありますよね。それを開放してあげるということも大事ではないかと思っています。

ちなみに、伊折さんは大学を卒業されたら、どうされるのですか。広島には残りたいと思われますか。

(伊 折)

特に考えていなくて、私が必要とされる場所でしたらどこへでも行きたいと考えています。特になければ、広島県で活動していきたいと。

(知 事)

無理に言わなくても、幅広く就職の機会を見ていきたいということですか。

(伊 折)

そうですね。

(知 事)

ちなみに、ずっと、生まれも育ちも広島ですか。

(伊 折)

広島県です。

(知 事)

ちょっとは外を見てみたいというもの。

(伊 折)

そうですね。

(知 事)

是非いい仕事の機会があるといいと思います。本格的な活動がこれから始まりますよね。もう始まっているのかもしれないですけども、頑張ってください。

(伊 折)

ありがとうございます。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、今村さん、お願いいたします。

(今 村)

NPO法人「ピースビルダーズ」の今村と申します。よろしくお願いいたします。

今日の午後、ピースビルダーズが運営するカフェにお越しただいて、ありがとうございます。ありがとうございました。

(知 事)

ありがとうございました。

(今 村)

ピースビルダーズは幾つか活動をしていて、フェアトレード商品を扱うカフェというのも一つの活動です。

(知 事)

フェアトレードというのを簡単に説明していただいていた方がいいですか。

(今 村)

はい。フェアトレードというのは、日本語で言うと公正貿易ということで訳されるのですが、途上国などで生産されたものを適正な価格で、生産者に適正な利益が得られるような価格で取引をしようという取組みのことをフェアトレードと言います。

(知 事)

そうですね。ちょっと補足をすると、昔はよくコーヒー農園などでもものすごく過酷な労

働条件で生産をして、それを先進国に輸出すると。つまり、発展途上国の労働者を搾取してそういう貿易をするというようなことがあったのではないかということで、そういうのを是正しようというのがフェアトレードですね。

(今 村)

はい。そのフェアトレード商品を扱っている雑貨とか、コーヒーとかを扱っているところも一つの活動なのですけれども、そのほかにも幾つか活動を展開しておりまして、基本的には平和をつくる人たちを支える活動をしているというのがピースビルダーズです。国内活動の例としてそのフェアトレードのカフェがあって、それをちょっとさらに広げて、広島市の人たちに世界中のいろいろな紛争を経験した国のこと、例えば天災に遭って大変なところの紹介をしていくというのも一つの国内活動になっています。今だったらカフェのほうでちょうど写真展をしております、ハイチの大地震の後に現地に入られた方が撮った写真を展示しています。くしくも先週末に日本でも大きな地震があって、本当はその時点で写真展が終わる予定だったのですけれども、ちょっと会期を延長させていただいて、まだ展示しております。

国内の活動はそういう啓発活動を多くやっているのですけれども、もう二つほど大きな活動の柱がありまして、一つは人材育成の事業です。これは外務省の委託事業で1億円規模の大きな事業を受託しております。毎年大体100人ぐらい、100人ほどはいかないですけれども、日本の人たちだけでなく、アジア15カ国から研修員を集めて、広島で研修をして、国連ボランティア計画という、国連の各機関にボランティアスタッフとして人を派遣している機関があるのですけれども、そこを通して国際機関での経験を積んでいただくという人材育成の事業をしております。これが結構高い評価をいただいております、毎年90%近くの日本人の研修員の方が国連機関で就職されています。

もう一つの柱として国際活動があるのですけれども、フェアトレードの現地支援のほかに、ボスニア・ヘルツェゴビナですとか、アフリカのルワンダやシエラレオネなどで、その地元の方を対象にした平和を維持していくためのネットワークづくりや、ワークショップということをしております。

ピースビルダーズの名前のもとになっているのが、平和構築という学問分野で平和構築というのはあるのですけれども、紛争を経験して、社会がいったん壊れてしまった後のところで、どうやってもう一回社会を立て直していくか。建物も含めて、社会のネットワークも含めてなののですけれども、そういうところの理論的なところにもともと軸足があるのです。それを実践としてやっていくためにはどうしたらいいか。理論と実践の結びつきというところをととても大事にしています。

ざっと御説明したら、活動内容はそういう形になります。

(知 事)

ありがとうございます。広島と言えば、当然に平和都市、あるいは国際都市、それから知名度という点から言っても、日本の地名で東京と並ぶ、あるいは東京以上かもしれないと言えるくらい、東京、京都、広島というのはほかの都市と群を抜いて有名なところだと思えるのですが、そういう中であって、広島のそういう平和貢献活動というのはどんな状況にあるとお感じになっていらっしゃいますか。

(今 村)

正直な話、広島での活動は、とても行政主導だと感じることが多いです。それが良い悪いは様々あると思うのですが、実際に私たちがシンポジウムを開催したときや、イベントをしたときの集まりというのは、あまりいいほうではないと正直思うのです。というのが、人口の差もあるのですが、広島でシンポジウムやイベントを開いて、30人集まったと言ったら、「わーすごいね」ということになるのです。それより60人、70人とか100人規模となったら、どんどんスケールが大きくなっていくという感触になってしまうのです。

ただ、広島という土地柄、平和に関連することに関心の高い方はすごくたくさんいらっしゃいます。たくさんそういうグループがあるのですが、それぞれがとても小規模でおさまってしまっていると感じています。いろいろと平和に関連したイベントをして、例えば世界の偉い人が平和講演会をしますとか、そういう平和というタイトルに基づいた大きなイベントはあったりするのですが、それよりももっと地元で若い人がやっている活動、地道に被爆証言の活動をされている方、国際協力関係に力を入れているところなど、そちら側にもっとサポートをしていただけたほうが、より地域に根ざしたボトムアップの平和都市ということになるのではないかと実感として思っています。

(知 事)

なるほど。実践している部分をもっと手助けするということですか。

(今 村)

そうですね。

(知 事)

大きな講演会などは、イベントとして、それはそれで啓発という意味では大事なのですが、実際に活動している、活動していると言うと幅が広くて難しいのですが、復興支援だとか、あるいは地域の改善だとか、そういうことをやっているところを助けてもいいのではないかと御趣旨ですか。

(今 村)

はい。そうですね。ブランド力というのは、とてもあると思うのです。広島の平和というブランドは確立しているのです、その次のステップとして、中身の拡充をさせていくということが言えると思うのです。

(知 事)

そういう意味では、まだまだ広島という名前が活用しきれていないということなのか。

(今 村)

そうですね。具体的に申し上げますと、例えば全国の人たちを集めてすることができるシンポジウムや、私たちの場合だったら、人材育成事業をするときに、どうしても、というか、行政からのバックアップがあったほうが話の通りやすいところ、細かく申し上げたら、県庁から県庁だとか、そういうところの行政側が持っている全国に対するルートをもっと私たちにも活用させていただきたいという希望を持っています。

(知 事)

なるほど。資金を出すとか、そういうことではなくて、持っているその他のネットワーク、技術ソースの一つだと思いますけれども、そういった技術ソースをいろいろ提供したりするということですね。

(今 村)

そうですね。もちろん国際援助はお金がすごくかかるので、資金的なところでもいろいろバックアップをしていただけたらありがたいです。

(知 事)

それはそれとしてね。なるほど。ありがとうございます。

これから将来に向けて、広島はどういったことができるのかということを考えると、広島というと平和と連想されることというのは広島の非常に大きな強みだと思うのです。それはもっともっとうまく使うことができるのではないかと考えています。県としては、今年1年、広島の平和貢献の新しい構想をつくるということを進める予定にしています。まだ発表していないのですけれども、何名か非常に世界的にも影響力のある人たちにメンバーになっていただく予定になっていますので、そういった中でもいろいろ考えていきたいですし、その中身がもちろん足下の動きと乖離してはいけないので、今村さんのような

方々の御意見もいただきたいと思っています。よろしく願いいたします。

(今 村)

お願いします。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、三島さん、よろしく願いいたします。

(三 島)

NPO法人「ウイングかべ」の三島と申します。NPOと語るには、私たち、思い入れが随分ありまして、可部のまちはとても優しく、楽しくて、住みやすいまちになりつつあるということを実感しながら、今、障害者支援とあわせて、まちづくりという、NPOのミッションを二つ掲げまして活動を始めて8年ぐらいになります。私が始めたのは小さな小さな作業所で、20年前なのですが、特に精神科の疾患を持った心の病と言われる人たちが寄り添い集まる、そういう作業所からスタートしたのです。やはり障害者支援はとても制度的にもめまぐるしく変わりました。

(知 事)

そうですね。難しいですね。

(三 島)

そうです。今も自立支援法が民主党のいろいろな問題で確立されていない。そういうあやふやな法律の中で、私たちが今NPOの法人格を持って、自分たちに何ができるかというところからスタートすると、今、働く場所が要るのです。それから、住んでいるまちが元気を取り戻してほしいと。そういう願いの住民の人たちと一緒に、古民家を4年前に再生しました。

(知 事)

古民家ですか。古い民家ですね。

(三 島)

そうです。江戸の終わりの150年から200年を経過したやままゆ問屋さんを受償の貸与をいただきました。それから、地域の皆さん2,000人を超える募金を集めまして、900万円近い募金が集まりまして、それでまちのど真ん中、可部のまちは狭いのですけれども、

その真ん中の可部夢街道と私たちで呼んでいるところに拠点として整備できました。

(知 事)

それはすてきな拠点ですね。

(三 島)

そうです。可部のまちで笑って暮らしたいという、本当に私たちの障害者支援をしている法人からの願いも含めて、そこに住んでいる市民と一緒に、地域づくりを取り組みました。本当に、随分手応えがありまして、働く場所としては、みんなが自分の力を取り戻して、認められて、それで生き生きと、その場所を持てたという、働くことの喜びと、夢と、目標と、やっぱり希望が持てたのです。それを地域の皆さんが与えてくださった。

今、可部のまちにはNPOという組織だけでも12団体以上あるのです。結局は、市民が自分たちのまち、わがまちを知って、どんなまちにしたいか、その思いの強さが今「可笑屋」を拠点にいろいろつながって、紡がれていって、皆さん声をかけやすい、そういうまちに変わりつつあります。そのことを今、実感しながら、うれしく思っております。今の日本で起きている震災を私たちが考えたときに、肩書きも、所属も、障害も、男女の差もなく、みんなが寄り添えるという、そういう地域になったらうれしいなど、本当につくづく、その拠点から見える感想です。

(知 事)

ありがとうございます。今、そういう優しいまちに可部が変わっていったというか、そういうふうにおっしゃったのですけれども、それは、やっぱり変わっていったのですか。それとも、何か出てきたのですか。どういう変化だったのですか。

(三 島)

どちらもあると思います。20年前、ようやく政令指定都市になって安佐北区が誕生したころは、私たちの場所もひっそりと、決して表に出ない、そういうまちでした。太田川橋を渡ると、可部は、ベッドタウンではありましたが、えっ可部と思われるような、少し不便なところ、田舎のように思われていました。しかし今は、市民活動をされている大きな可部カラスの会などがあるのですが、そういう方たちの文化の掘り起こしと、それからいろいろな活動を結びつけてくださったというのがあります。地域づくりとしては、100年前のバスを走らせてみたり、小さなお祭りをもうちょっと盛んにしたり、地元にある掘り起こしを丁寧にされています。その中に私たちも手をつなぐことができたので、今の可笑屋の実現にあると。皆さんがまちづくりを楽しんでいるのです。すごく楽しんでやれているというのが、変わっていかれていると思います。

(知 事)

楽しくないと長続きしないですからね。

(三 島)

私たち福祉に携わる視点からすると、昔は福祉のまちづくりとか、福祉でまちづくりと言っていたのです。今は、聞くところによると、福祉はまちづくりなのだ。「は」が変わったところは、やはり福祉の領域が随分大きく広がって行って、障害を経験した、体験した人たちなのですけれども、その人たちにもそのまちで暮らす喜びを伝えていけたらと、そういうふうに思います。

(知 事)

すばらしいですね。可部は、確かに田舎の部類かもしれませんが、全体から見ると、やっぱり都会なわけですね。世の中全般から見るとね。そういう中で、新しいまちづくりがしっかりとできるというのは、すごく希望が持てますね。つまり、昔は人間関係が非常に強かった地域がだんだん薄れて行って、その中でそれをもう一回再生していこうというのとちょっと違って、もともと都会的な人間的なつながりの薄さがあるところなのだけれども、それをみんなの思いで新しくつなげていくという。それがうまく行って可笑屋ができた。

(三 島)

うまくいっているか分かりませんが。

(知 事)

本当に人の力の可能性というか、思いが強い人たちが集まると、こんなことができるということを実践されているのかなと、お話を聞いて感じました。

(三 島)

やっぱり思いがなければ、このまちに暮らしたいという気持ちは出てこないです。

(知 事)

そうですね。でも、可部に住んでいる人は可部ラバーですね。可部ラバーが多いですね。

(三 島)

そうかも分かりません。そう言えば、わがまち自慢でも出たりしました。是非一度お越

しくださいませ。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、大変お待たせいたしました。横倉さん、お願いいたします。

(横 倉)

マツダ株式会社のボランティアセンターに登録しております、安芸区の阿戸町の山の中、2 kmのところにあります「里山あーと村」というところでボランティア活動しております。

この里山あーと村は、地元の阿戸町と、我々参加市民、市民といっても大竹や竹原、広島市だけではなく遠くの方も参加しております。その人たちと、安芸区の農林課、行政が三民一体で里山の再生や、豊かな里山の再生など、いろいろな体験をしております。

野菜の会、そばの会、ものづくり、森づくり、ビオトープ、エコエネルギーという部会に分かれていまして、月にそれぞれの部会が活動しております。4月の24日に開村式をするのですけれども。

(知 事)

開村式ですか。村を開く。

(横 倉)

里山アート村ですから、23年度の開村式をします。4月1日の市民と市政に載ります。そこで、今年度の新しい方、継続の方を募集して、新しくまた始めます。

(知 事)

毎年、毎年、そうやっておられるのですね。

(横 倉)

やっております。

その部会活動とともに、ビジターの方も呼ぶということで、先ほどの開村式、それから田植え、森と木工の日、それから去年10回目を迎えましたけれども森のジャズライブ、稲刈り、収穫祭、2月にとんど祭りをするというので、部会活動プラス一般の方も呼んで合同行事をずっと1年間やっております。その中で私はジャズライブの実行委員長をやらせていただいております。

森づくりと言いますか、できているところを紹介したいのですけれども、2000年にマツ

ダのボランティアセンターのほうに、ボランティアで公園をつくるという募集がありました。そのボランティアというところにひかれて行きまして、2001年から参加しまして、最初参加した年に、ほんの30人ぐらいしか座れないベンチがあるだけのところで説明を受けました。その年に森をみんなで整備しましたら、アテネのコロシウムのような、すり鉢状の地形があらわれまして、あるメンバーからそこでジャズライブをしたいねという提案があって、地元と参加市民と安芸区の三民一体で、仮設のステージ、それからベンチも60脚、スギの丸太、広島市の間伐材を半分に割って、ベンチ60脚をスタッフがつくってジャズライブを始めました。それが昨年で10回目を迎えたのですけれども、通常森の整備というのは、いろいろと日本の森林は人件費の問題などいろいろありまして、間伐材がそのまま捨てられているという状況にあるのですけれども、それを使ってベンチをつくったり、ログハウスをつくったり、そのことによりまして、我々市民のボランティア力で森の整備を毎年やっています。ちょっとずつのボランティア力によって、昨年は約600名のお客様が来ていただくようなイベントになりました。

(知 事)

600人ですか。

(横 倉)

600人来ていただきました。

(知 事)

すごいですね。そこまで行くのが結構大変ではないのですか。

(横 倉)

大変でした。

第1回目は百何人でしたけれども、それから徐々に。そういう活動をしておりまして、思うのは、皆さんも同じなのですけれども、思いのある方が集まれば、どんなことでもできると。思いが必要だということです。里山あーと村も、参加者、それから地元の方、行政の方、いろいろな人に恵まれました、ジャズライブを夏にやっているのですけれども、これは屋外でやりますので、皆さんから秋か春にやってくださいと言われますけれども、アウトドアでやりますから、雨に絶対遭ってはいけません。幸いなことに、10回すべて、会場で雨が降っていないのです。

(知 事)

すばらしい。私が行くと降りませんよ。晴れ男ですから。

(横 倉)

今年是非来てください。

そういうことでやっているのですけれども、8月に向かって森づくり、ベンチづくりをやるとなると、本当に大変です。毎回、水を2リットルとか5リットルとか飲みながら、汗びっしょりかきながら、毎年こつこつ整備をしています。

それと、その活動の中で、我々そばの会は、休耕田を借りて、そばを植えて、そばを今度は収穫して、そばを打って、そのジャズライブでそばをお渡しして、というのをやっています。おいしいです。そのそばを目当てにジャズライブを聞きに来てくださるリピーターの方もたくさんいます。

(知 事)

ちょっとえさが付いているわけですね。

(横 倉)

そうなのです。そばの会の人たちも、それが励みになりまして、豊平のどんぐり村の検定試験に行っておりまして、4段の人が2人になりました。4段というと、名人の下になる達人クラスになります。どんぐり村とも、そういうそばの交流があるということです。

というところで、週末里山人ですけれども、楽しく参加させていただいています。

是非今年、8月最後の日曜日にジャズライブをやりますので、湯崎知事にも是非、御公務がお忙しいでしょうけれども、聞きに来ていただければと思います。

(知 事)

ありがとうございます。

ちなみに、横倉さんが会社のボランティアセンターに最初に行かれて、特に里山をやろうと思われて行かれたわけではないと思うのですけれども、横倉さんにとって、この活動の意味はどういうところにあるのですか。

(横 倉)

仕事でイギリスに行っていて、イギリスの公園をいろいろ見ました。日本のように、コンクリートで固めたような公園でなしに、自然の公園がいっぱいありました。帰ってきたときにこのお話があったのと、アジア大会以降、マツダセンターに登録して、ごみ拾いを中心とするボランティアをずっとやっていました。それらを含めて、2000年の募集に、ボランティア力で森の施設を整備しようという、その文句にころっときまして。

(知 事)

では、その森というところにやっぱり思いがあったわけですね。

(横 倉)

森と、大工仕事もしてまして、いろいろな建物もつくっておりますので、そういうところに引かれまして行って、もう今年 11 年目ですけれども、どっぷりつかって楽しくずっと通っております。

(知 事)

私、資料をいただいている、マツダでエンジンの設計をされているエンジニアの方ということなのですが、今、SKY-Gとか、一遍に幾つもつくってどうだと山内社長がおっしゃっていましたが、こんなに一遍に違うエンジンはつくれないと。きっとエンジニアの方が大変だろうなと思いながら聞いていて、まさにその当事者の方がここにいらっしゃるのですけれども、お仕事も忙しいですね。そういう中でこういう活動にかなりのエネルギーを使われていると思うのですけれども、その両立というのはどうなのか。

(横 倉)

確かにジャズライブの準備なので、我々も 10 時、11 時まで会社で働いていて、帰って 2 時、3 時までジャズライブの準備だとか、ボランティアの仕事をするわけです。途中、確かに大変です。でも、その結果で、あとお客さんが喜んで帰っていただく姿を見たら、その達成感、それでなせるのではないかと。

(知 事)

それがまた仕事のエネルギーになってくるのですか。

(横 倉)

なっています。会社で疲れたのを、日曜日に里山に行って、違うところの筋肉を使ったり、右脳左脳の反対側を使ってリフレッシュできていると思います。家でのんびりしているより、働いて筋肉痛になったり、いろいろな仲間と談笑してリフレッシュしたり、そういうことはプラスになっていると思います。

(知 事)

私は、広島という土地が、広島市は大都会ですけれども、非常にそれを両立しやすい環境にあるのではないかと思います。例えば東京に住んでいて、とてもではないですけれ

ども、里山に行くというだけで片道 2 時間か 3 時間ぐらいかかったりするので、物理的に疲れ果てて、相当無理をしなければできないのではないかと思うのですけれども、広島の場合はそれが割と近いところにありますから、両方やっても、両方にプラスなのではないかと思えます。それはいい環境だと思います。

(横 倉)

1 人、里山あーと村に参加している仲間で、釣り好きのメンバーがいます。その人は山陰や瀬戸内海に釣りに行きます。里山あーと村になぜ参加したのと聞くと、釣りをさせてもらって海の幸をいただいていると。その上流に上っていくと、海があり、川があり、山があり、里山を再生して豊かにすれば、海が豊かになると。その循環の中でありがたく釣りをさせてもらっている。そのために里山をと考える方もいます。

(知 事)

なるほど。本当に恵まれていると思えます。

(横 倉)

そうですね。

(知 事)

どうもありがとうございました。

(横 倉)

ありがとうございました。

自由討論

(知 事)

というところで、残りの時間がかかなり少なくなってしまったのですけれども、実は今回がこの知事懇談会の最終回になるのです。ある意味で言うと集大成でもありますし、広島県における広島市というのは4割を占めている部分で非常に重要なので、ちょっと大きなテーマについて皆さんに御意見を聞いてみたいと思います。これからの広島の将来を考えていくに当たって、今、県では広島の良いところを伸ばしていこうという話をしております。端的に言って、どうでしょうか。広島のココがほかにはないいいところだと、思われるところを代表の方にお伺いをしたいと思うのですけれども、どなたか、こんなところじゃないかというのはございますでしょうか。質問の振りが大きすぎて、みんなびっくりしていますが、はい。

(横 倉)

新婚旅行のときに一緒になった神戸の友達が広島に遊びに来たのですけれども、広島ってこんなに緑が豊かなんだということを言われて、私は神戸のほうが絶対きれいなまちだと思っていたのですけれども、神戸のまちの人がそう言っていました。だから、先ほど湯崎さんが言われましたように、森が近い。市内も、原爆の後にいろいろなところから木を寄附していただいて、その木が育ってきて、緑の豊かなきれいなまちだと。川もきれいで、そこを誇りに持つべきだと常々思っています。私自身は愛媛県出身で、今はもう広島のほうが長くて、広島県人と思っていますけれども、でも、本当に広島はきれいなまちだなど。誇りにもっと思っているなと思っております。

(知 事)

なるほど。美しさですね。そうですね。私もそう思います。本当に毎日住んでいて、私も広島で生まれ育ったので、きれいなまちだなんて一度も思ったことはなかったのですけれども、その後、東京に行くと、360度見渡してもどこにも山もないし、海もないし、私は五日市で育ったので、目の前は海だったのです。海に行くのにそもそも1時間とか2時間かかるとか、最初は息が詰まりそうでした。リーガロイヤルホテルに行って、上から景色を見ると、まさに社会で習ったそのままの三角州というのがよく分かるのです。山があって、すごくきれいだなどと改めて思います。ありがとうございます。

ほかにどなたか、いかがでしょうか。河副さん、今、何かあるというサインを。

(河 副)

私もこの出身ではないのですけれども、やはりよそと比べるということができまして、やっぱり広島県というのは食べるもの、地産地消ではないのですけれども、よその県よりもすごく身近に、私たちが取り込めるものがあるところだと思います。やっぱり食べることは一番力になることなので、それができる県というのは本当に元気な県だと思います。

(知 事)

そうですね。ありがとうございます。これも、本当におっしゃるとおりで、魚とか、すごくおいしいですね。瀬戸内で捕れる魚はいっぱいあって、小魚や、もちろん有名なカキ、その他のタイとか、サヨリとか、ギザミとか、カレイとか、いっぱいありますよね。この間、東京で旅行雑誌をつくっている編集者の人たちに広島を紹介するというイベントをやったのです。広島の食材を食べていただいて、そのときに実は藤本さんのキャビアも使わせていただいたのですけれども、広島の食材だけで御提供して、いろいろ感想を聞いたのですけれども、「広島って、お魚がおいしいんですね」と、そのときにそう言われたのです。外ではそういう認識なのです。

広島の食べ物というと、カキとお好み焼きともみじ饅頭みたいなイメージなのですが、本当はたくさん身近にあって、お野菜も本当においしいですね。

(河 副)

そうですね。だから、それを取り入れて、皆さんもとりあえず地産地消、地産地食と言って食べてもらいたい。食べて、私たちが本当に広島のよさを分かって、それを皆さんにアピールしていきたいと思っています。

(知 事)

そうですね。広島のもものは、ほとんど広島の人たちが食べてしまって、外に出て行かないという、それで知られていないというのが多々あるのですけれども、本当にそういう恵まれた環境が食においてはあると思います。

ほかはいかがでしょうか、北さん。

(北)

育児の面から言っても、今までの意見で出てきたように、山が近い。海も近い。また、近代的な市内中心部も近いということで、僕の場合は、山のほうだったら海田の海田運動公園とか、広島市にも、周りにすごく緑の豊かな公園があって、中心部にはいろいろ施設があって、そういう面で育児もしやすい。

一番いい点は、知事がイクメンというのが僕的にはいいところだと思います。

(知 事)

ありがとうございます。

本当にそうですね。自然の経験、体験をさせるというのは、子どもにとってとても大切なことだと思うのですが、それがすごくやりやすいですね。うちの子も、僕は忙しいのでなかなか連れていけないので、実は週末にそういう自然体験をさせるようなクラブに入れていて、行かせているのです。日帰り、9時に行って5時ぐらいには帰ってくるのですが、その中で本当にたっぷりと自然を楽しんで帰ってくるわけです。そういう環境は、本当はない。しかも、都会的なサービスがある中で、そういうことがすぐにできるというのは、本当にほかにはない環境だと思います。

ほかには、いかがでしょうか、齋藤さん。

(齋 藤)

主人が転勤族で、いろいろな県で生活をしたので、広島はとても水がおいしいです。

(知 事)

水がね。もともと御出身は、広島ですか。

(齋 藤)

いえ、出身は隣の山口県です。

(知 事)

いろいろと回ってみたら、水がおいしいと。

(齋 藤)

はい。

(知 事)

そうですね。広島、西条は酒所ですね。なぜ酒所かと言うと、おいしいお水があるからということなのです。県北の北広島とか、お米もできるわけですが、これは気候的にも実はおいしいお米ができる気候なのです。食味計といって、おいしさを計るものがありますよね。あれで計ると、有名な魚沼産のこしひかりよりも広島のお米のほうがおいしいのですよ。ブランド米よりもね。それは、そういう気候条件と、やっぱりお水がおいしいということでしょうね。豊かな森があって、おいしいお水もできるということですね。そういう意味では、非常に恵まれていますね。

ほかにどなたか。山本さん、お願いします。

(山 本)

広島は、先ほど横倉さんが言われたように、近くに海もある、山もある。今日、実はアーキウォークのメンバーで午前中に似島のほうに建築を見に行っただけですけども、広島というのはそういった瀬戸内海の島々もすぐ近くに行けるような場所で、自然豊かな場所だなと思います。似島に降りて気づいたのは、やっぱり静かで、広島市内などの都会もあるので、たまには静かな場所に身を置けることもできるような環境もあると思いました。

私は建築系の大学を出ておまして、学生的时候はよく東京や大阪、地方のほうに有名な建築や集落を見に行ったりしたのでですけども、広島に帰ってきて、ほっとするなど。住みやすいまちだなというふうに感じています。以上です。これが私の意見になります。

(知 事)

ありがとうございます。島というのも、おっしゃるようにすごく重要な宝ではないかと思えます。島は、もちろん住んでいる方々にとっては、交通が不便であるとか、いろいろな課題はあるのですが、宮島などもそうですけれども、島に渡ると、我々島に暮らしていない人間からすると、渡った途端に非日常がそこにあるのです。ちょっと違う世界に行くという、移動も含めてね。そういう体験ができるというのも非常にほかにはないところだと。気軽に島に渡るというのは、それこそ広島だったら当たり前なのですが、ほかのところだとあまりないですよ。新潟に行っても、佐渡に行くといったら、えらい大変なことで、何時間も船に乗っていかないといけないのですが、宮島は10分で、そうでなくて似島なども気軽に行けるような、そういうところも恵まれたところではないかと思えます。

それでは、そろそろ時間が来たので、最後にどなたか、今村さん、どうですか。最後に締めてください。今の流れの中で、何か。広島のいいところ。

(今 村)

土地的ないいところというのは、皆さんがおっしゃるとおりで、本当にすてきなところだと思いますけれども、ちょっと私は広島市生まれ、広島市育ちなので、ほかの県北のほうは分からないというところもあるのですが、そういう自然の環境がある中で、まちなかで割と外国人の方が多いとか、若者のサブカルチャーみたいなところが結構盛んだというところが私はすごくいいところだと思っています。いろいろな面が見られる。

(知 事)

多様性があると。

(今 村)

はい。もちろんそうですし、ちょっと幅の広いものの見方ができるようになるのかなというのが、すごく広島のまちにいてよかったなと思うところです。

(知 事)

そうですね。これからもっともっと多様性を大事にしていかなければいけないですね。

今、日本というのが新しい時代を迎えていて、ある意味でいうと世界の最先端なわけです。新しいものをつくっていかなければいけないのです。そのためには、「知識創造」が必要であるとよく言われたりしますが、これも単純な話で、三人寄れば文殊の知恵ということなのです。この三人寄ればというのは、どういうことか言うと、やっぱり多様であるということなのです。同じ頭の構造をした人が集まっても創造的なものはできないということで、いかに多様な力をあわせていくかというのが、これからの社会、日本のような最先端にある社会では大事なことではないかと思っています。

県も多様性をもっと進めていこうという施策を出してしまして、広島の若い人たち、高校生とか、もっと海外のことを経験してもらおうとか、体験してもらおうということもその一つですし、たくさんの留学生に、広島で勉強してもらって、さらに、勉強するだけではなくて定着してもらって、社会の中に取り込んでいくとか、そういうこともその一つです。もっと身近なものとしては、女性にもっと社会の中で活躍をしていただくという、そういうこともその一つですし、そういう「三人寄れば」の三人をたくさんつくる。5人、100人、1,000人でもつくって、新しい時代をつくっていければと考えています。

閉 会

(知 事)

というところで、今日はこれで終了とさせていただきたいと思います。

10人の参加者の皆様、本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

冒頭申し上げましたように、いただいた意見をいろいろためこんで、我々としてこれからいい調味料をつくっていきたいと思っておりますので、これからも御協力をお願いします。

また、傍聴の皆様も、最後までずっとおつき合いをいただきまして、本当にありがとうございました。椅子がちょっと固いので、おしりが痛くなったのではないかと思いますけれども、本当にありがとうございました。

これから、いろいろな広島の良いところを、みんなで力をあわせてもっともっと伸ばしていく。日本の中で最高の広島、世界の中でも誇れる広島県をつくっていきたいと思っています。是非これからもよろしく願いいたします。今日は本当にどうもありがとうございました。